

ドドネウス「植物誌」

樋 口 康 夫

この度、図書館長や職員の方々のご尽力により非常に貴重な図書を購入して戴きました。知られる限りでは、この本（正確にはこの版）は稀少であり、現在日本では熊本大学のみが存在するということです、これからはこの図書館の宝の一つに数えられることは確実でしょう。

皆様はドドネウスという人物をご存じでしょうか。日本史を選択された方の中には記憶の片隅にこの響きが残っている人もおられるでしょうが、ほとんどの方はご存じないと思われます。しかし江戸の中期、蘭学が盛んであった頃、多少とも西洋の学問を志したことのある者の耳には、彼の名は届いていたと思われます。というのも、当時熱心に求められ、高額であがなわれたオランダの書物のリストの中に彼のものも入っていたからです。特に、今回購入されました本 *Cruydt-Boeck*（植物誌の意）は野呂元文によって寛保から寛延年間にかけて「阿蘭陀本草和解」として翻訳されております。

そこで、この本の紹介をさせて戴くことになりますが、まずドドネウスの略歴から始めたいと思います。彼は、ラテン語では、Rembertus Dodonaeusと呼ばれ、1517年にかつてのフランドルス、現在のベルギーの首都であるブリュッセルとアントワープとのほぼ中間の所にあるメヘリン（Mechelin）という町に生まれました。父は裕福な商人であったようです。18歳でルーヴァン大学の医師の資格を取得し、以後10余年にわたりヨーロッパの主として大学を中心に転々として学問を修めたようではありますが、詳細は判っておりません。ただ、彼は幼少の頃より古典の素養があり、地理学、天文学、博物学、取り分け、植物学には情熱を傾けて精励していたことが知られており、恐らくは、専門の医学のみではなく、広い意味での人文科学の多様な知識を深めていたと考えられています。彼は、1546年頃から積極的に著作活動を始め、出版社からの要望もありほぼ毎年のように出版をしています。当時図版を載せた植物誌は各国で非常に人気があり、様々の形で出版されました。彼の本も各国の言語に翻訳され、順調に版を重ねております。その間に、彼は故郷のメヘリンに戻り、開業しましたが、名医としての評判が高くなり1548



Rembertus Dodonaeus, 1517-85
(ドドネウス35才頃の肖像とされている)

年には市の担当医の職につき、1574年まで勤めております。在職中に、その条件よりは有利と思われる、ルーヴァン大学の教授の職、スペイン王の宮廷への招きなどがありましたが、断ったとされております。しかし、彼の名声は極めて高くなり、オーストリア皇帝マクシミリアン2世の侍医への招聘は友人の紹介もあって、承諾しております。ドドネウスはこの職を4年程で去り、ケルンなどに一時的に居を定めました。そして故郷のメヘリンに戻っている間に、ライデン大学の植物学の教授に任命され、ほぼ3年勤めた後、1585年に没し、その地の教会に埋葬されました。

さて、この本の原本となったのは *Stirpium Historiae Pemptades Sex*（以下の説明のように、全6巻が5部よりなる植物誌の意）という名の、フォリオ版の大きなサイズの本で、1583年、アントワープで出版されております。これは一冊本ですが、全6巻で、各巻が5部からなり、つまりは最終的には30部からなる構成となっております。ドドネウスはこの2年後に死んでおりますけれども、この本はその前に彼自身によって加筆、修正がなされ、1616年にその改訂版が出ております。この本は題名からも察せられますようにラテン語で書かれていたために、それを翻訳した自国版（オランダ語）が必要とされ、改訂と増補を加えて、これもフォリオ版の *Cruydt-Boeck* がフランソワ・ファン・ラ

ヴェリグによってライデンのプランタン社から1608年に出版されました。この第2版、つまり、1618年出版のものが今回の本となります。

内容的には上で紹介したラテン語版とほぼ同じものとされており、以下おおよそその内容の説明を致しますと、この本は第1巻第1部が総論となっておりますが、以下は、植物の名称のアルファベット順の解説書であり、第2巻は香りの良い花や花輪になるような植物、第3巻は主として根が薬用にされる植物、第4巻は穀物、豆類、水草などの植物、第5巻は食用となる植物や園芸植物など、第6巻は樹木の他に、(両)インドを含む外国の植物が主に述べられております。その記述に当たっては、現代の分類法からすれば問題はありそうですが、厳密ではないにしても(花の)形態によって近種のものをまとめるなど、おおよそ科学的な分類

の萌芽が見られるとされております。また、各植物の項目ごとに、種類、形態、生息地、花期、名称、性質、薬効、利用法、追記などの整然とした説明がなされております。こうした近代の特徴をそなえたシステムテックな説明の方法は後の植物誌のひな型となりました。

この本は度々申し上げましたように、大形のフォリオ版で、本文のみで1495ページの非常に立派なものであり、当時の専門家に彫らせた端正な図版も多く載せられていて、保存状態も良く、眺めているだけでも4百年の時を越え、かつての朴訥とした博物学者の情熱が伝わるように感じられます。ご来館の折に皆様が高覧下されることを希望します。

(ひぐち やすお 法学部教授 英文学)

永青文庫蔵雑記類より(一)

細川宗孝の死(1)

西田耕三

熊本藩第七代の藩主であった細川宗孝は、延享4年(1747)8月15日、江戸城内において、旗本板倉修理に襲撃された。宗孝33歳、修理22歳。この事件は、馬場文耕の『近代公実厳秘録』や松崎観瀾の『窓のすさみ』、それらに依る芥川龍之介の『忠義』等によって知られるが、さらにこれらの原拠となった実録、あるいは記録類が多く書かれ流布していたことが高橋圭一氏によって報告されている(「板倉修理の刃傷」、「国語と国文学」、平成8年5月号)。永青文庫蔵の、『隠見細倉記実録』(写本、3巻1冊)、『八代橘柑』(写本、5巻1冊)も、この事件の記録・実録である。『隠見細倉記実録』の最初の条を引用して事件を紹介しておこう。(句読点引用者。一部表記を替えた)。

如毎例月次出仕之儀は、諸大名不残事也。扱大広間の面々は、兼て申合にも無之儀なれ共、高位の御方に候得ば、御上座宜く御間定り、諸侯出仕のうへ大目附見繕あり、御礼始り候事也。細川越中守殿毎之通座席に着座、其以後小用所に被参候処に、跡より来りし人や有けん、誰ともしらず抜打に首筋際打懸たり。是はと思ひ給ふ内に、たゝみ懸て左の肩へ

切懸たり。越中守殿も、我に覚る敵なし、全乱心人成べし、殿中と申とかく組伏ばやと思はれ共、其内手疵深ければ叶難く、如何せんとしばし立休らひ給ひし内に、誰いふとなく、小用所に大乱也と云声のしければ、御杉戸御番兩人、御徒目附衆聞付け、早々御目附衆へ告ければ、大目附石河土佐守殿、御目附中山五郎左衛門殿其外追々馳集りて、土佐守殿、越中守殿江向ひ被申候処に、誰人共不知、誠に血に染みたる如くなれば、御家名はと問し時、たえしき声にて、細川越中守と答ふ。誰人討かけしやと尋の時、越中守殿答られしは、誰共見分けず、上下着用の者なりとありしかば、夫より直に土佐守殿、御徒目付呼て、御坊主の分外へ散不申様に集め可置由、扱又御門を早速打せ申べし、其段達し候様にと、御目附衆より被申渡ければ、早速申通して、御玄関前御門より外、桜田迄の御門を打たりけり。越中守殿療治の儀は、詰合の御医師衆に被仰付之。夫より切懸し人有べしと、大勢相尋しに、ゑんの上に抜身の脇差あり。扱こそ此所に脇差あれば、此近所外へは行まじ、殊更無刀と見へたり、隈々を



Kumamoto University Library Bulletin, No.20, June. 1998

● ドドネウス「植物誌」

永青文庫蔵雑誌記類より（一）

● 細川宗孝の死（1）

● デジタル人間の図書館感

● 検索の現在と未来

—学術情報センター・セミナーに参加して—

● 電子図書館事始めⅢ

—学内紀要の電子ジャーナル化—



ドドネウス「植物誌」（1618年版）